

海老名市民を中心に活動を続ける「レーベンフロイデ合唱団」が今月5日、10回目の節目となるコンサートを開く。1枚2千円のチケットを販売し、1100人収容の大ホールをい

っぱいにしようという意気込みだ。趣味の域を脱しているが、かつては練習の厳しさに団員がまとまって脱退したこともあったとい

(関根光夫)

# 表現の高み目指し10年

## 海老名・レーベンフロイデ合唱団



本番を控え、熱のこもった練習を続けるレーベンフロイデ合唱団の団員ら—海老名市社

合唱団が発足したのは99年3月。海老名市立有馬中学校の教師とPTAの役員を中心に、25人で結成された。

団の名称はバッハ作曲の「カンタータ147番」から選んだ言葉「レーベン(命、生き様)」「フロイデ(喜び)」を使った。「団の名前通り、感動を与える歌を目指している」と佐藤千津子団長

(60)は話す。「中には『ほとんど楽しん』という方々もいて、団を離れて行きました」

現在、指揮を担当する乾健太郎さん(43)は、厚木高校出身で、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団などでも指揮をとる。99年秋にあった第1回コンサートを聴きに行き、「団員らの情熱を感じた」という。翌2000年4

## 5日に節目の演奏会「幻の曲」演奏も

月から指導を続けているが、「他にない表現を目指そう」という自発性は、団員の中に一貫している」と話す。今回、演奏するのは団名の由来となったバッハ作曲の「カンタータ147番」、79年の初演以来、演奏されていなかった高田三郎作曲「ひたすらな道」など。

カンタータでチェンパロを弾く水永牧子さんは、札幌農学校(現北大)の1期生だった故大島正健氏(海老名市出身)の子孫。クラーク博士の「ポイズ・ビー・アンピシャス」という言葉を世に伝えた」とされる。水永さん自身も台風で倒れた北大のボプラ並木で作ったチェンパロを06年9月に演奏して話題となった。

幻の曲だった「ひたすらな道」の演奏を提案したのは団員の砂賀佳宏さん(48)。厚木高校3年生だった30年前、東京・上野での初演を聴き、印象に残ったという。「節目となる公演で、ぜひやってみたいと提案したところ、賛成してもらった」と話す。

「創立10周年記念コンサート」は5日午後4時から、海老名市文化会館大ホールで。入場料は全席指定で2千円。問い合わせは若山さん(046・239・2796)。